

## 8 節 ロシア



▲① ロシアと周辺地域の自然環境 (Diercke Weltatlas 2008, ほか)



►② シベリアのタイガの中を走る鉄道 (イルクーツク近郊)

●地域の考察方法● ロシアは、1922年にソビエト社会主義共和国連邦(ソ連)として世界最初の社会主義国となった。しかし、20世紀末に社会主義体制が崩壊し、現在は新しい国づくりを進めている。この節では、民族や産業など地域を構成するさまざまな事象を項目ごとに整理して、考察していく。

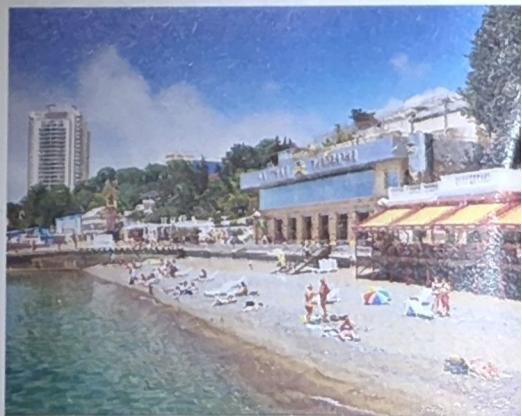
### ●広大な国土と多様な自然環境

ユーラシア大陸の北部に位置するロシアは、アジアからヨーロッパにまたがる世界一広大な国土をもち、その面積は日本の約45倍にも及ぶ。そのため、10以上の標準時が設定されている。行政上、  
全国は8連邦管区からなり、さらに州・地方・共和国・自治州・自治管区などの連邦構成主体に分けられ、これらは日本の都道府県にほぼ相当する。ロシアは、古期造山帯の比較的低い山が連なるウラル山脈より西のヨーロッパロシアと、東のシベリア、極東地域に分けられる。かつてはウラル山脈から東をシベリアとよんでいたが、現在では、サハ共和国とアムール州から東側の地域を極東ロシアとよび、シベリアと区別する。

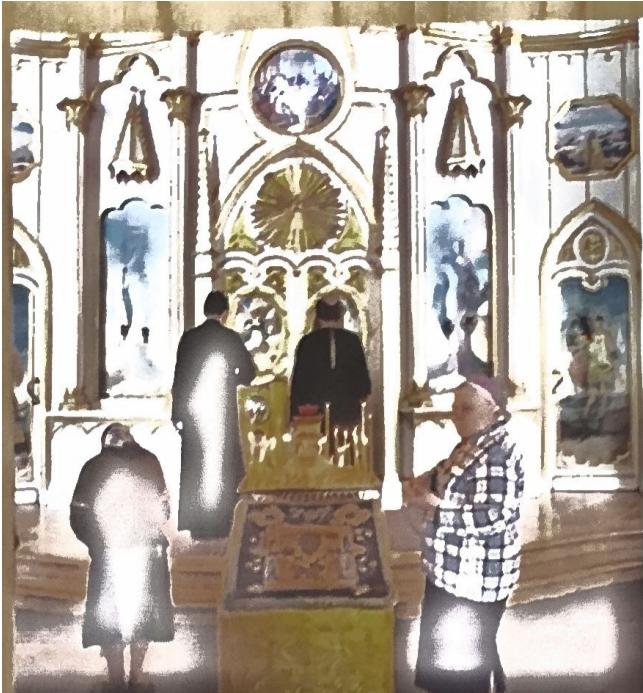
自然環境についてみると、国土の大半は冷涼な寒帶や亜寒帶気候であるが、南部にはステップや砂漠も存在する。シベリア北部の北極海沿岸には永久凍土<sup>(→ p.68)</sup>の地域が広がり、<sup>►③</sup> タイガ<sup>(→ p.68)</sup>の下の土壤は一年中凍結している。北極海へと注ぐオビ川、エニセイ川、レナ川などの大河は冬に凍結し、その水が春に上流から順にとけるため、下流部ではしばしば洪水が起こる。<sup>►④</sup> 内陸部では大陸性気候となるため、気温の日較差が大きくなる。一方、極東地域は冬の寒さは厳しいが、<sup>►⑤</sup> 夏の気温は日本とほぼ同じであるので、<sup>►⑥</sup> 気温の年較差が大きい。黒海沿岸は比較的温暖であり、世界有数の保養地として知られる。



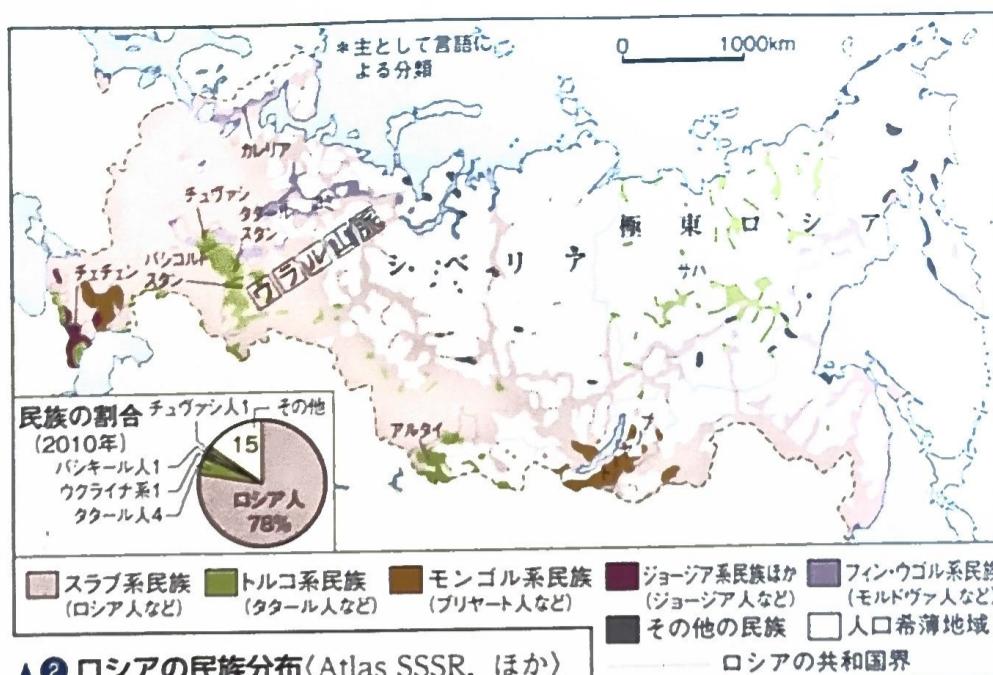
▲③ 凍った洗濯物 (ヤクーツク近郊) <sup>せんたくもの</sup> -40℃以下の戸外では、洗濯物はあっという間に凍ってしまい、氷をたたき落としてかわかす。



▲④ 黒海沿岸の保養地ソチ (2011年撮影) ロシアでは比較的温暖な保養地で、2014年には冬季オリンピックが開催された。



▲① 教会で祈りをささげる人(サンクトペテルブルク, 2010年撮影)



## 1 ロシアの歴史と社会の変化

### ロシアの成り立ち

ロシアの人口の約80%を占めるロシア人は、ロシア語を話し、おもな宗教はロシア正教である。ロシア人は全土に広く分布しているが、おもにはウラル山脈以西に住んでいる。少数民族は、極東ロシアに多く、タタール人やナナイ人のように、外見上、日本人と似ている民族もある。

ロシアの前身であるソビエト社会主义共和国連邦(ソ連)は、1922年に世界最初の社会主义国として誕生し、共産党による計画経済が進められてきた。しかし、1991年のバルト3国の独立をきっかけにソ連は解体し、さらに12の独立国が生まれた。それらのなかで、最も人口が多く、世界最大の国土をもつのがロシアである。カザフスタンなど中央アジア諸国や、アゼルバイジャンなどカフカス地方の国々は、ソ連を離れて完全に独立国となった。

一方、カフカス地方北部のチェchen共和国やダゲスタン共和国のように、ロシアの内部にとどまつたものの、民族的にはロシア系以外の人々が多い行政単位もある。

### CISの結成と加盟国とのかかわり

ソ連解体後、ロシアは新たに誕生した多くの共和国との間に友好関係を築こうとした。そこで、旧ソ連構成国との間に独立国家共同体(CIS)というゆるやかな国どうしのまとまりを結成し、政治と経済の相互協力関係を維持している。ただし、かつてのソ連によって支配されていたことを否定的にとらえたバルト3国やトルクメニスタンは加盟せず、のちにロシアとの間に深刻な対立を生じたジョージアは脱退した。

現在の加盟国はカザフスタンやベラルーシなど9か国である。この

年	事項
1917	ロシア革命、ロマノフ王朝の滅亡
1922	ソビエト社会主义共和国連邦(ソ連)成立
1928	第1次5か年計画始まる
1940	バルト3国を併合
1945	第二次世界大戦終結 この後、米ソの対立深まる(冷戦)
1986	チェルノブイリ原発事故 ペレストロイカ政策始まる
1989	米ソ首脳会談—冷戦終結宣言
1991	バルト3国の独立を契機にソ連解体、独立国家共同体(CIS)誕生
1994	チェchen共和国の独立派にロシア軍の武力行使始まる
1998	通貨切り下げなどによる金融危機が起こる
1999	経済が好転し、高度成長始まる
2006	サンクトペテルブルクでサミット開催 ソチオリンピック開催
2014	ウクライナに侵攻、クリム(クリミア)半島の併合を宣言

▲③ ロシアの歩み

## ●ロシアとヨーロッパの間でゆれるウクライナ

ウクライナは、旧ソ連構成国の中でもカザフスタンについて面積が大きく、国土の東側はロシア、西側はヨーロッパに接している。東部はロシア人の割合が比較的高く、ロシアとの関係を維持したい親ロシア派の住民が多いのに対し、西部はウクライナ人が大半を占め、EUをはじめ西欧諸国との関係を強めたい親西欧派が多い。こうした事情に、ロシアやEUのおもむくもからんで親ロシア派と親西欧派の政権交代がたびたび生じ、内政が混乱していた。

資源・産業面では、国内の石炭や鉄鉱石をもとに重化学工業が発達していたが、原油や天然ガスには恵まれず、ロシアからの輸入に依存していた。しかし近年、ロシアが天然ガスの値上げを提示し、反発したウクライナへの天然ガス供給を停止するなど、資源をめぐる問題が生じるようになった。



▲④ クリム(クリミア)半島のロシアへの編入を求めるデモ(ウクライナ、セヴァストポリ、2014年撮影)

こうした背景もあり、2014年、ウクライナ東部からクリム(クリミア)半島にかけて、親ロシア派の住民と親西欧派のウクライナ政府が衝突し、ロシア軍が介入したことから国内紛争に発展した。ロシアはクリム半島の併合を宣言したが、国際社会はこれを強く非難しており、現在でも対立が続いている。



共同体結成の大きな目的は、ソ連時代に各地におかれた核兵器や軍事基地をどう管理するかにあった。これをロシアが一元的に管理することになったので、CISは軍事・安全保障面での協力関係という性格が強く、経済的な協力関係は薄い。

### 経済と生活の変化

ソ連が計画経済から市場経済に転換した1980年

代後半から90年代にかけて、経済と社会は混乱し、国民の多くは物価の上昇と生活物資の不足に苦しんだ。資本主義の導入によって経済の効率化が最優先されたため、効率の悪い国営企業の多くは解体され、職を失った人々も多かった。事業をおこして大きな富を手に入れる者が現れた反面、年金生活者などは厳しい生活を強いられ、貧富の差が広がった。

しかし、1990年代後半から2010年代前半まで、原油・天然ガスなどの資源開発が進み、国際市場での原油価格高騰によって、ロシア経済は発展した。近年では **BRICS** の一国として、その将来性が注目されている。一方で、富と政治の中心であるモスクワやサンクトペテルブルクと、地方農村との経済格差がめだつようになつた。

その原因是、工業生産の中心となる地域が限られていること、広大な農村地域に対する新たな農業政策がほとんどられていないことがある。ロシアの成長は、原油・天然ガスなどの資源開発とその関連産業を中心としたごく少数の産業が牽引する形となっている。



▲⑤ ロシアに進出した外国資本のショッピングセンター(サマーラ、2014年撮影)

石油産業がこの地域の経済成長を支えており、都市部を中心に、外国企業が積極的に進出している。

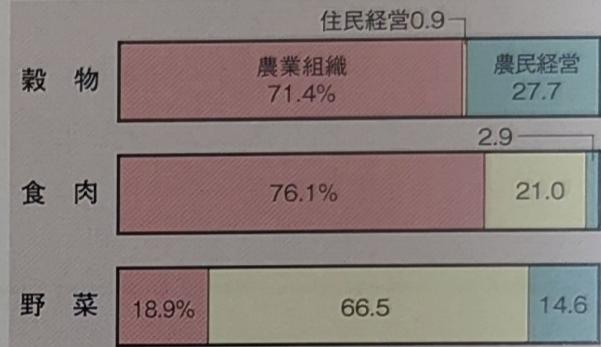
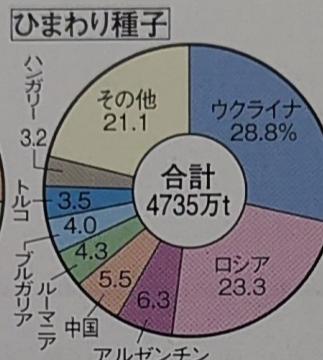
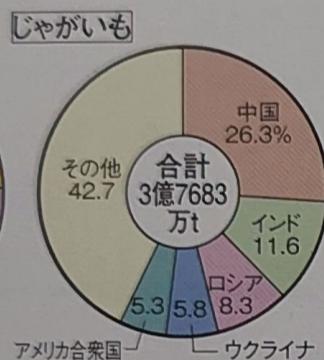
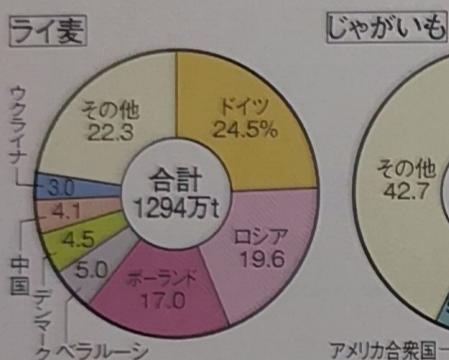
### チェック

ロシアは、旧ソ連構成国との間にどのような関係を築いていったのか、説明しよう。



▲① ダーチャでの野菜栽培(イルクーツク)

►② ロシアと周辺諸国の農業  
(Diercke Weltatlas 2008, ほか)



▲③ おもな農産物の生産量(2016年)〈FAOSTAT〉  
▲④ 経営形態の割合(2016年)〈ロシア統計局資料〉

## リード

図②や図⑤のようなロシアの産業について、自然環境や他国との関連に着目してみていこう。

## リンク→

化石燃料の分布と利用(p.121)  
BRICSの工業化と後発工業国(p.143)

① 現在のロシアの農業は、大規模な「農業企業」、自宅付属地やダーチャなどでの小規模自給経営である「個人副業経営」、個人独立農場である「農民経営」の三つの農業形態によって担われている。

## プラスα

### 農業がさかんな黒土地帯

ウクライナからロシアにかけて、**チエルノーゼム**とよばれる肥沃な黒土が広がり、農業生産がさかんである。冬も温暖な気候なので、冬小麦の生産が多い。  
また、じゃがいもやてんさい、搾油用のひまわり種子、ライ麦などの生産量も多い。

## 2 大きく変化したロシアの産業

### ロシアの農業

ロシアの農業は、小麦や大麦を中心とする穀物栽培

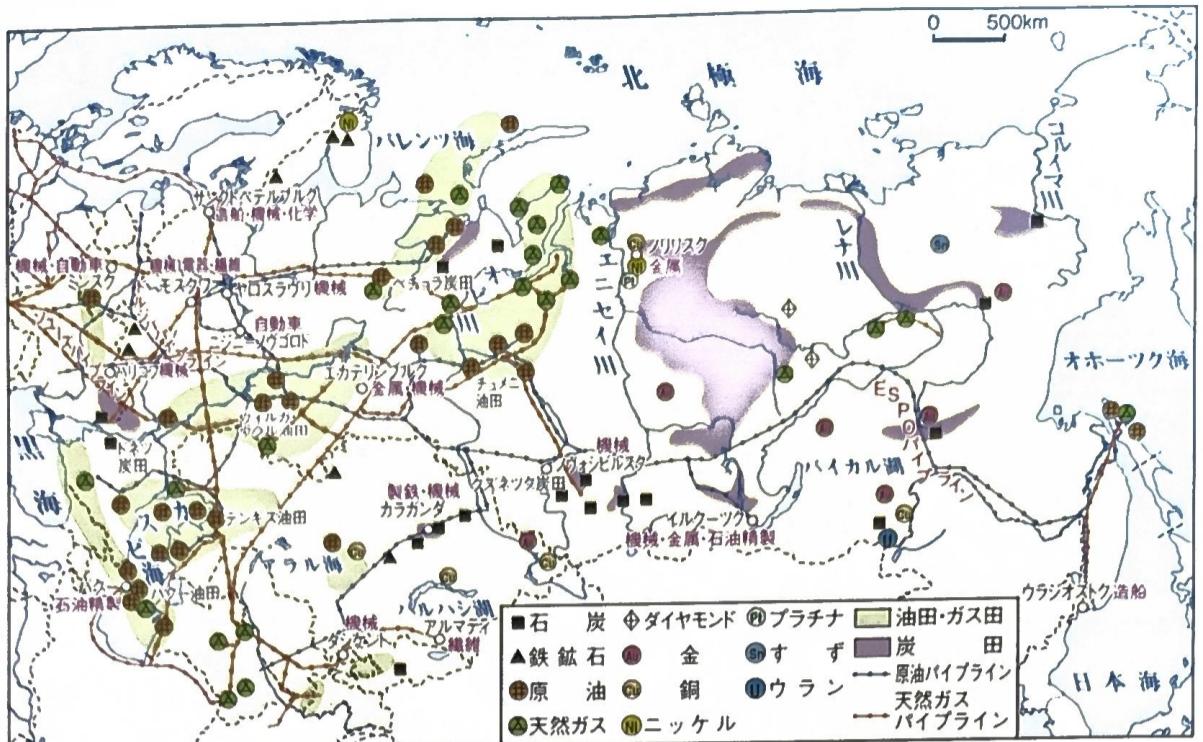
(→巻末211)(→巻末212)

と、てんさいやじゃがいもなど寒冷な気候に強い作物の栽培が中心となっており、小麦はロシアの主要輸出品となって

いる。広大な耕地面積をもつものの、単位面積あたりの生産性はヨーロッパに比べて低い。

農業生産の中心は、東ヨーロッパ平原やカフカス山脈北側などヨーロッパに近い地域で、てんさいやじゃがいもを中心とする野菜が生産されている。黒海沿岸などの比較的温暖な地域では、小麦や野菜の栽培のほか、畜産もさかんである。沿海地方では漁業がさかんで、日本向けの水産加工品などが主たる産業となっている。

かつてソ連の時代には、コルホーズ(集団農場)やソフホーズ(国営農場)が農業生産の基盤となっていたが、現在では企業による農業や菜園つき別荘(ダーチャ)での個人生産へと変化している。しかし、社会主义の時代に生産性に応じた収入を得られなかつた歴史が長かったので、生産性の高い企業的な農業への転換は簡単ではなく、農業法人の整備は遅れている。



▲⑤ ロシアと周辺諸国の鉱工業（Diercke Weltatlas 2008, ほか）  
読図 資源の分布とパイプラインに着目しよう。



▲⑥ サンクトペテルブルクに進出した日系企業の自動車組み立て工場（2011年撮影）

### ロシアの 鉱工業

現在のロシアの産業と経済の特徴は、鉱産資源の開発に支えられているところが大きく、原油・天然ガス（→ p.121）

の輸出は世界有数である。従来は採掘費用が高かったため抑えられていた永久凍土の地下にある原油や天然ガスの開発も急がれている。（→ p.68）

このほか、金や鉄鉱石でも世界有数の埋蔵量を誇っている。

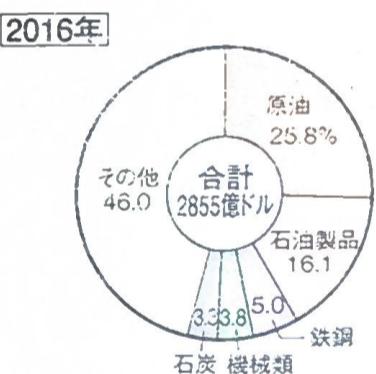
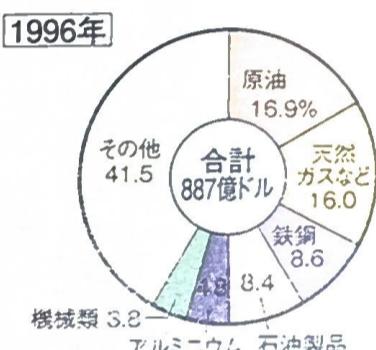
シベリアにはプラチナや金・銅などの鉱山が分布し、極東地域にもダイヤモンド鉱山がみられる。また、ヨーロッパロシアでは、沿ヴォルガ連邦管区とウラル連邦管区に原油・天然ガスが集中しており、なかでもチュメニには国内最大の油田がある。

近年ロシアは、製造業の分野でも世界の注目を集めている。サンクトペテルブルクは、ロシア連邦となってから急速に港湾や交通網を整備して、自動車や家電などの工業の発展がめざましく、製造業の拠点になりつつある。また、2005年に経済特区を設置し、外国資本の誘致に力を入れるようになったことで、欧米や韓国、日本などの企業が進出するようになった。

### 資源を めぐる動き

ロシアは収入の多くを原油や天然ガス、石油製品の輸出から得ている。おもな輸出先はEUなどヨーロッパ諸国であるが、ウクライナの例のように、ロシアは石油資源

を他国との安全保障政策に利用することがあるため、ヨーロッパ側は、資源のロシアへの依存度を下げようと努力している。一方で、2009年末には東シベリア・太平洋向けのESPOパイプラインが稼動を開始した。これにより、ロシアは韓国や日本、中国への原油輸出を増加させており、東アジアとの関係を強めようとしている。（→ p.291）



▲⑦ ロシアの輸出品の変化（UN Comtrade）

② 2005年には、工場で生産活動を行う工業生産特区、研究開発活動が主体の技術導入特区が設置された。

### チェック

- 1) ロシアの農業の抱える課題について、ソ連時代からの経営形態の変化をふまえて説明しよう。
- 2) ロシアは、資源をめぐる周辺諸国との関係をどのように変化させてきたか説明しよう。